

## 第二編

富士宮の自然と向き合った人々





# 第一章 先史〜中世…自然を生かした暮らしと信仰心のめばえ

## 第一節 火山噴出物からわかる遺跡の年代と分布

### 火山噴出物から得られる情報

富士宮市域にある遺跡の多くは、富士山の広大な山麓を中心に分布しており、富士山の火山噴出物やそれらを主な母材とした風化火山灰土や土壌によって厚く覆われている。

当時の住居や倉庫などの建造物は、掘削しやすい風化火山灰土を建物の基礎として利用して作られ、また造成された平坦地は、日常生活の場として使用されている。しかし、何らかの要因によってこれらの建造物などが放棄されると、新たな風化火山灰土や火山噴出物が、長い年月をかけてそれらを埋没させていく。私たちが遺跡や遺構にみる土層断面には、その土地の利用と放棄され埋没していく土地と人々との関わりの歴史が記録されている。土層中に挟まる火山噴出物は、当時の人々に直接的に影響を与えた災害要因を表すだけでなく、この地に住む人々の生活様式の変遷を理解する上で不可欠な年代を教えてくれるものもある。

さて、ここでいう「火山噴出物」とは、火山の噴火によって直接もたらされる溶岩・噴石・火砕流・火砕サージ・降下火砕物（主にスコリア）などを指す。その中には、より遠方の火山の噴火によって飛来したガラス質の細粒な火山灰で構成される降下火砕物も含まれる。このうち、溶岩・噴石・火砕流・火砕サージは、それらに含まれる噴出物そのものの熱や衝撃によって、そこに住む人々の生命や生活空間を奪う噴火現象であり（第一編第一章第四節）、その痕



写真1-1

はるな 榛名山ニツ岳の噴火の火砕流・火砕サージ堆積物に埋没した「甲よろいを着た古墳人」

群馬県渋川市の金井東裏遺跡で発見された。

跡は地形や地層として明瞭に認識することができる（写真1-1）。一方、降下火砕物は、上空に放出されて破砕されたマグマが固化して落下・堆積したものであり、当時の地面の凹凸や生活面をそれらの形状どおりに覆うことから、降下火砕物からなる地層の縞模様は同じ時に堆積したことを示す等時間面として理解することができ。富士山から噴出した大沢スコリアは、富士宮市域に厚く堆積しており、この地域の代表的な降下火砕物である。

日本列島およびその周辺には多くの火山があり、それらの破局的・爆発的噴火によって高く噴き上げられた噴出物は偏西風によって広域に運ばれた後、富士山麓にも降下・堆積し、細粒な火山灰の地層として確認できる。それらは肉眼で視認できるほど明瞭で厚いものもあれば、風化火山灰土の中に火山ガラスや鉱物粒子の濃集部として混在しているものもある。

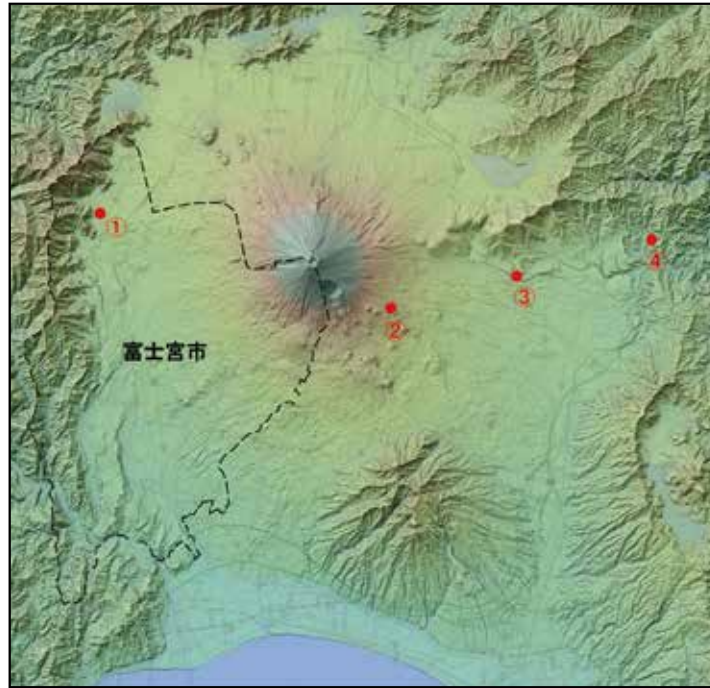
このようなガラス質の細粒な火山灰を「広域テフラ」とも呼び、富士山麓でも古くから知られ、離れた地域で確認した地層とその堆積した年代をつなぐ重要な存在である（写真1-2）。最近の調査結果も含めると、主なものとして、噴出年代の古いものから順に、富士山の活動開始時期の指標となる御岳火山起源の御岳第一テフラ（町田 一九九〇・On-Pm1 約一〇万年前）、古富士火山（富士火山星山期）の降下火砕物からなる地層中に挟在する始良カルデラ起源の始良Tn（丹沢）テフラ（町田・新井 一九七六・AT 約三万年前）、浅間火山起源の立川ローム上部ガラス質テフラ（山崎 一九七八・UG 約一万三〇〇〇年～一万四〇〇〇年前（最近では一万八〇〇〇年前前後の知見もあり））、九州南方海域の鬼界カルデラ起源の鬼界アカホヤテフラ（町田・新井 一九七八・K-Ah 約七三〇〇年前）、伊豆諸島北部新島火山起源の新島式根島テフラ（小林ほか 二〇二〇・Nj-Sk 約七〇〇〇年前）、伊豆東部火山群のカワゴ平火山起源のカ

ワゴ平テフラ（葉室 一九七七・Kg 約三二〇〇年前）そして、新島火山の南西にある神津島火山起源の神津島天山テフラ（杉原ほか 二〇〇一・Kz-Tj 八三八年）があげられる（表1-1）。これら広域テフラが降下・堆積した層位（降灰層準）と遺構・遺物の形成・包含層準との層位関係を調査することによって、遺跡の成立時期を明らかにすることができる。広域テフラを始めとして地層中に挟在する火山噴出物は「時間の物差し」として非常に有効なツールである。

テフラ		年代
神津島天山テフラ	Kz-Tj	西暦838年
カワゴ平テフラ	Kg	約3200年前 縄文後期・晩期の境界の目安
新島式根島テフラ	Nj-Sk	約7000年前
鬼界アカホヤテフラ	K-Ah	約7300年前 縄文時代早期と前期を分ける目安
立川ローム上部 ガラス質テフラ	UG	約1万3000年～1万4000年前 (最近では1万8000年前前後の知見もあり)
始良Tn(丹沢)テフラ	AT	約3万年前 後期旧石器時代を前半と後半で分ける目安
御岳第一テフラ	On-Pm1	約10万年前

表1-1 広域テフラとその年代





露頭で視認できる広域テフラの主な確認地点



① カワゴ平テフラ (富士宮市麓) ※2層に別れてみえる



② カワゴ平テフラ (Kg) (御殿場市太郎坊)



③ 始良 Tn (丹沢)テフラ (小山町柴怒田)



④ 御岳第1テフラ (小山町柳島)

写真1-2 広域テフラが確認できる主な地点とその堆積状況

「➡」を付した位置に広域テフラを確認できる。



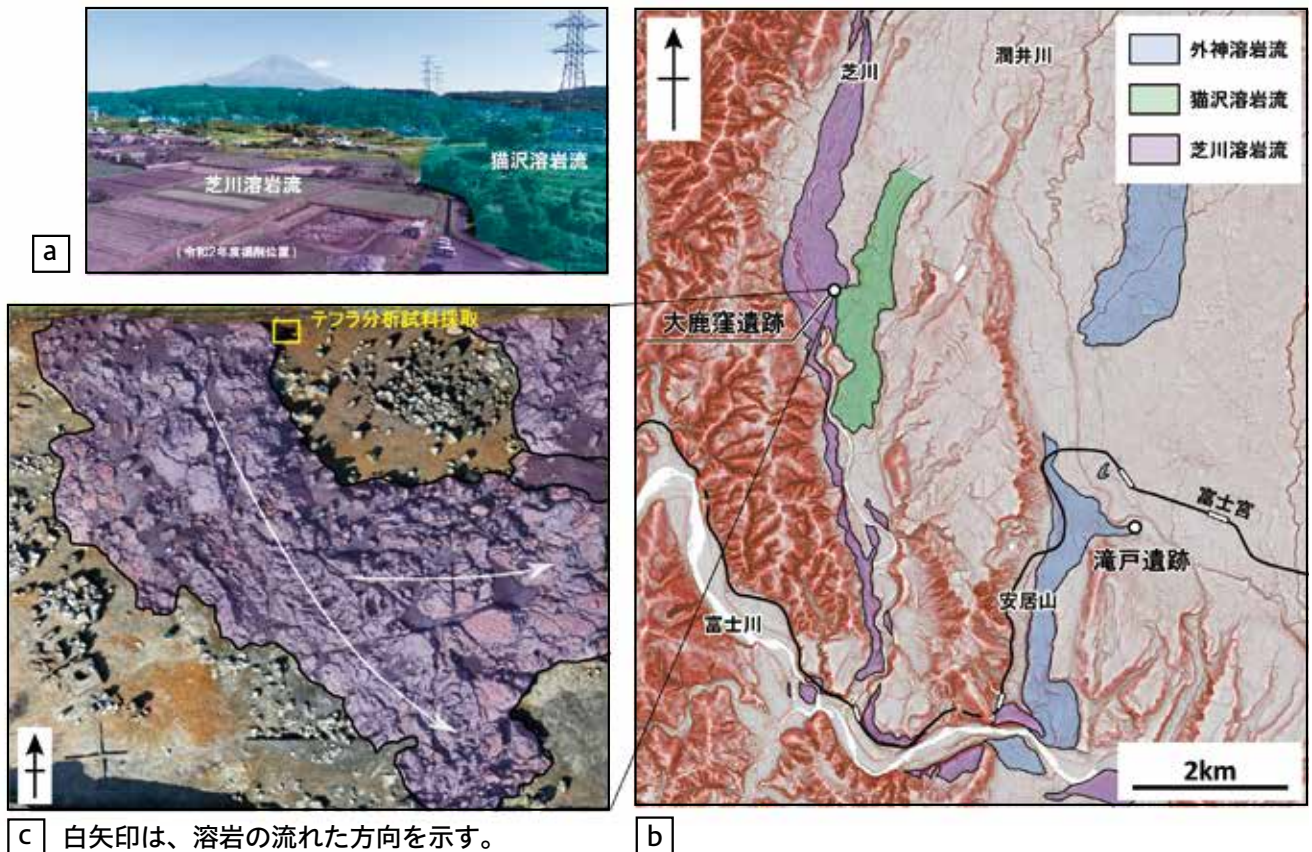
## 縄文時代の遺跡にみられる火山噴出物とその年代

大鹿窪遺跡、滝戸遺跡といった縄文時代の遺跡の発掘調査では、富士山から流れてきた溶岩流を覆う風化火山灰土および土壤中より、遺構・遺物などが多数発見されている。これらの風化火山灰土・土壌中からは、富士山起源のスコリア層や広域テフラ起源の火山ガラスも確認・検出され、遺跡の成立年代を知る手掛りの一つとなった。

大鹿窪遺跡の令和二年度発掘調査では、発掘エリアの東半部に溶岩が分布していた(図1-1a)。その分布形状は、北西から南東に向かって鶏の脚の形のように拡がっており、溶岩流の表面には、その流れの方向を示す縄状構造を伴っている(図1-1c)。また、この溶岩は大きな斜長石斑晶に富む特徴的な岩相を有する。これらの特徴より、大鹿窪遺跡で確認された溶岩は、大鹿窪遺跡の西側を北から南に芝川沿いを流下する芝川溶岩流(高田ほか二〇一六、約一万七〇〇〇年前)であり(図1-1b)、大鹿窪遺跡は少なくともその年代より新しい時期に成立したことがわかる。

芝川溶岩流を覆う風化火山灰土・土壌に着目すると、その中には、富士山起源の降下スコリア層として、上位から、大沢スコリア(町田一九六四・Os)、オレンジスコリア(村山スコリア(町田一九六四)に対比される可能性がある)の各地層を確認できる(図1-1c)。このほか、地表の耕作土直下には、大淵スコリア(宮地一九八八・Ob)に対比されると思われるスコリアの密集部を確認できる。

一方、広域テフラについては、火山ガラスの濃集層準とそれを構成する火山ガラスの形態、屈折率および主成分化学組成の特徴に基づき、既知の広域テフラとの対比とその降灰層準の特定を試みた。その結果、Obが密集する土壌質黒色シルト層(2層)中はKz-Tjの降灰層準、Os直下の土壌質黒色く暗灰色シルト(5A層)にKg



c 白矢印は、溶岩の流れた方向を示す。

図1-1 大鹿窪遺跡、滝戸遺跡周辺の地形と溶岩流分布

の降灰層準、その下位の暗褐色〜暗灰色風化火山灰土（6B層）最下部にNj-SkとK-Ah両テフラの降灰層準が推定された。芝川溶岩流を覆う明褐色風化火山灰土（7A〜10層）には、UG起源の火山ガラスが散在しており、明瞭な濃集層準は認められなかった。UGの年代は芝川溶岩流の年代と近接している可能性があり、その降灰層準は芝川溶岩流の挟在層準とほぼ一致、もしくは芝川溶岩の下位にあるためと考えられる。

大鹿窪遺跡での発掘結果によれば、6B層から7B層で縄文早期から草創期の遺物が確認される。この層位区間の最上位にあたる6B層で広域テフラであるNj-SkとK-Ahの降灰層準が推定され、約七〇〇〇年前の年代を示している。また、7B層で発掘された遺物が一万二五〇〇〜一万三三〇〇年前の年代を示すことから（本章第三節）、建物接地面の年代は一万三五〇〇年前頃、オレンジスコリアの年代は周囲に分布する溶岩の年代も考慮して一万三五〇〇〜一万四〇〇〇年前と考えるのが妥当であろう。

このことから、当時の大鹿窪では、建物建築前にオレンジスコリアがすでに降下・堆積しており、それを基礎として住居が建築され、人々が生活していたことがわかる。なお、大鹿窪遺跡内の別の遺構ではより古い遺物が確認されており、その形式などから一万五〇〇〇〜一万六〇〇〇年前の年代が推定されている（小林二〇一九・二〇二〇）。

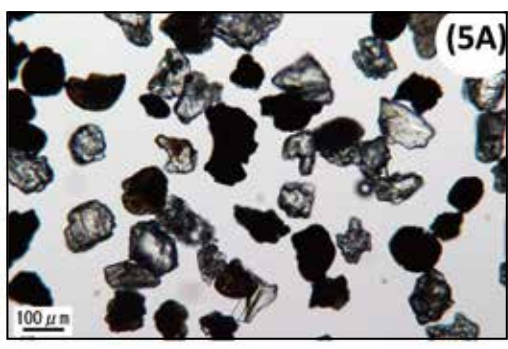
なお、滝戸遺跡の令和三年度発掘調査では、芝川溶岩流より新しい約一万年前に噴出した外神溶岩流（高田ほか二〇一六（図1-1b））を被覆する風化火山灰土中から縄文時代の遺物などが確認されている。この風化火山灰土・土壌からは、大鹿窪遺跡で確認された同じ層位で富士火山起源のスコリア層および広域テフラ起源の火山ガラス濃集層準が確認されている。また、遺物はオレンジスコリア



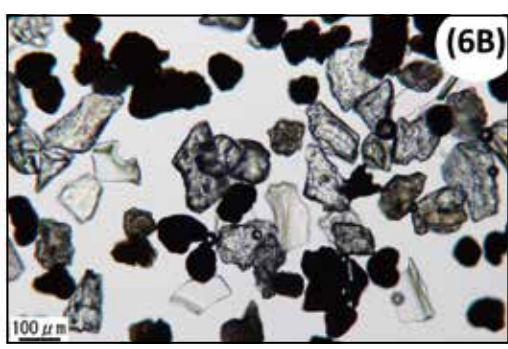
図 1-2 大鹿窪遺跡の土層断面



ア層上位のUG起源の火山ガラスのみを含む明褐色風化火山灰土層準から確認されていることから、滝戸遺跡は大鹿窪遺跡より新しい遺跡であることを広域テフラ分析からも確認できる。



カワゴ平テフラ  
(透明な軽石型火山ガラス)



鬼界アカホヤテフラ  
(透明なバブルウォール型火山ガラス)

写真1-3 大鹿窪遺跡で確認された広域テフラ起源の火山ガラス

**富士宮市の遺跡分布とその変遷**

富士宮市域では、後期旧石器時代から人々が自然環境に適応しながら生活し、その痕跡が遺跡として残されている。遺跡の分布は、当時の生活や社会の在り方、そこに暮らす人たちが何を受け入れたのかを示す。また、遺跡の分布を時期別に整理することで、その変遷を知ることができる。

ここでは、火山噴出物から知ることができる年代を軸に、時期ごとの遺跡分布をとらえて富士宮の自然を舞台とした人々の活動を見ていく。

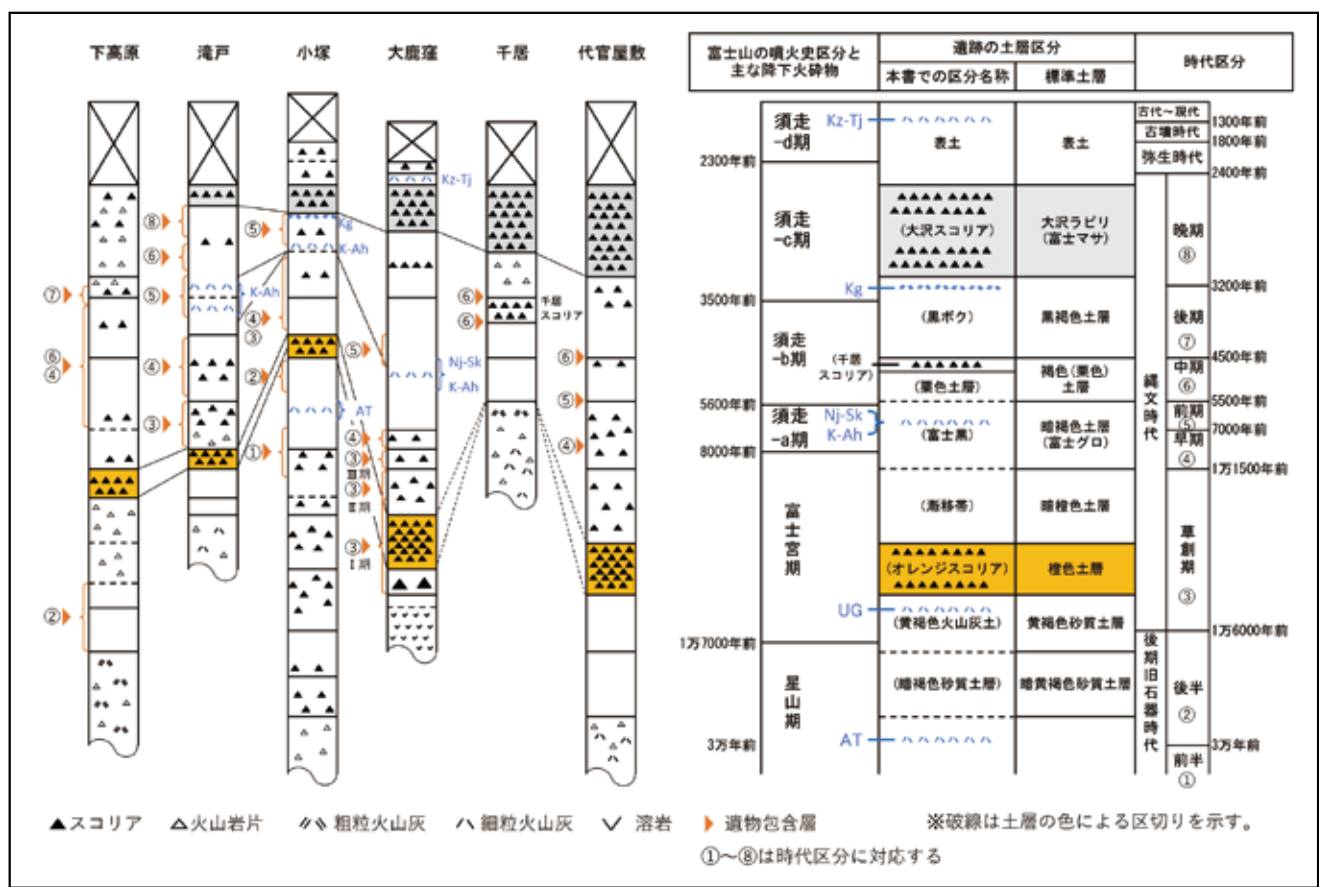


図1-3 時代区分と層序の対比

図1-3は、時代区分ごとの遺構や遺物が埋まっている地層（以下「遺物包含層」という）と代官屋敷遺跡（富士根地域）、千居遺跡・大鹿窪遺跡・小塚遺跡（芝川流域）および滝戸遺跡・下高原遺跡（星山丘陵）の模式的な地層を広域テフラおよび富士火山の主な降下火砕物により対比したものである。図中の降下火砕物のうち、「千居スコリア」は、千居遺跡において確認された降下スコリアで、千居遺跡以外では層としては確認されていないが、代官屋敷遺跡や滝戸遺跡などで地層中に散在する。本章第三節で述べるとおり富士宮市域における縄文時代中期と後期の境界である可能性があることから表中に示した。ただし、層位についてはさらに検討する必要がある。また、オレンジスコリアより下位の層序は、遺物包含層の調査が進んでいる愛鷹・箱根地域との対比を検討する必要がある。

図1-4は、時代区分ごとの富士宮市域の遺跡数をグラフ化したものである。遺跡数は、『富士宮市遺跡地図―第4版―』（二〇一三）によるものであるが、時期区分はその後の検討により変更される可能性がある遺跡を加除した。すなわち、遺跡地名表の時期区分による計数に、時期が明らかになった遺跡や時期が広がった遺跡を加え、ほかの時期となった遺跡を除外した。本編における市域の遺跡数はこれによる。

また、検討に当たって、地理・地形および遺跡の疎密状況に基づいて次のとおり区分した。

- ① 富士宮扇状地および周辺高地
- ② 潤井川流域 潤井川の屈曲部より上流の段丘、潤井川低地、潤井川低地より下流の沿岸および星山丘陵、安居山低地など
- ③ 芝川流域 羽鮒丘陵南部の西斜面、芝川中流域、羽鮒丘陵北部など。

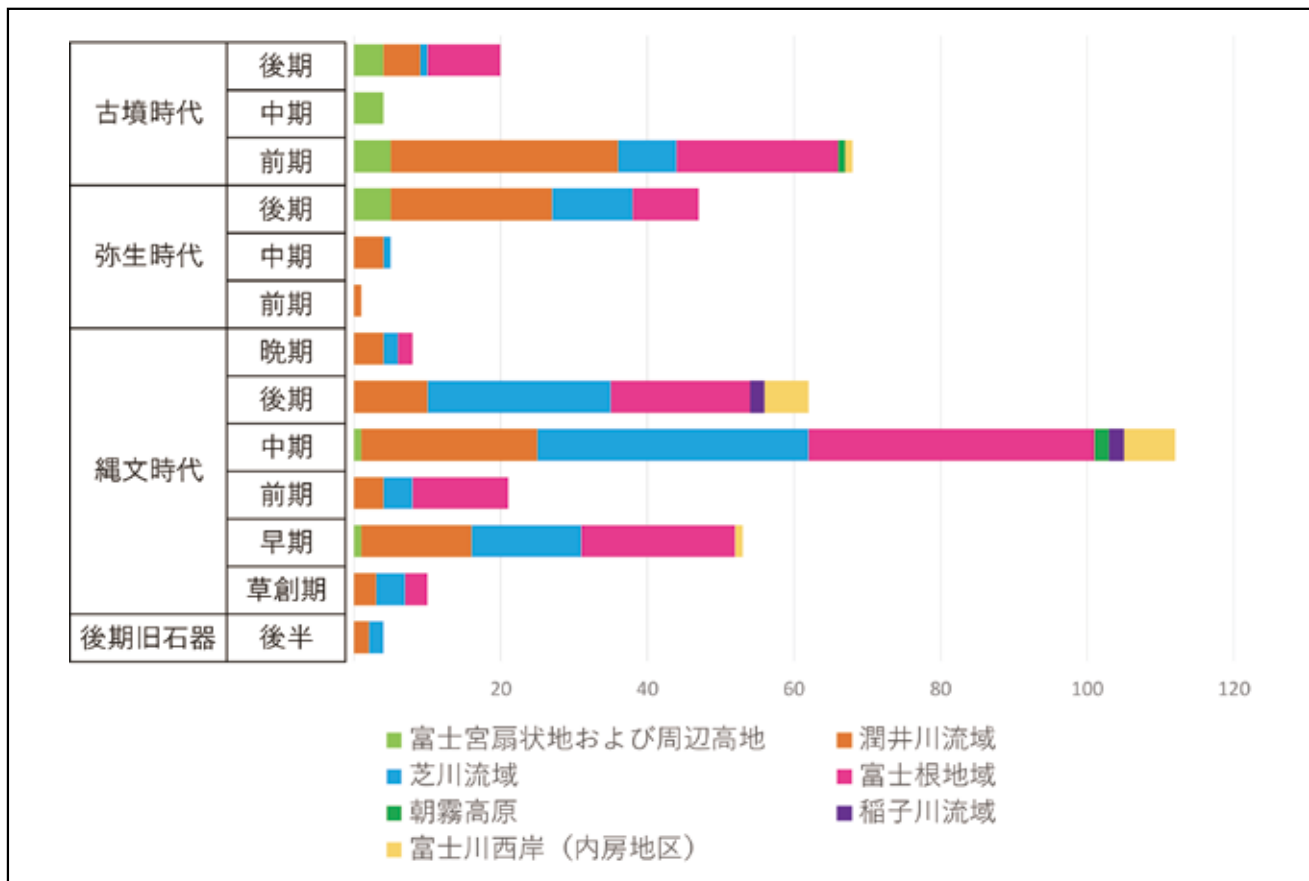


図1-4 地域における遺跡数の時代変遷



④ 富士根地域

⑤ 朝霧高原

⑥ 稲子川流域

⑦ 富士川西岸（内房地区）

⑧ 山体西斜面から大沢扇状地

このうち、山体西斜面から大沢扇状地には先史時代の遺跡の分布はない。

富士宮市域の遺跡数は二四八遺跡で、このうち先史時代（後期旧石器時代から古墳時代）の遺跡は二一九遺跡である。表1-2は、先史時代の主な遺跡である。また、図1-5は主な遺跡を赤色立体地図に描き入れたものである。

富士宮市域における後期旧石器時代の遺跡は四遺跡のみである。次節で述べるように、全国で多くの遺跡が確認され、静岡県でも箱根・愛鷹山麓から磐田原を中心<sup>いわたばら</sup>に多くの遺跡が確認されることは対照的に少ない。

縄文時代にはいると、草創期は一〇遺跡で早期に増加したのち前期に一旦減少し、中期に大きく増加した後、晩期にかけて大きく減少し、確認されるのは八遺跡となる。地域別に見てもほぼ同じ傾向を示すが、早期から前期にかけての減少の時期に潤井川流域・芝川流域で大きく減少するのに対し、富士根地域では三割程度の減少にとどまる。また、朝霧高原、稲子川流域および富士川西岸では縄文時代中期のごく短期間に遺跡が進出することがわかる。

弥生時代には前期の可能性がある遺跡は一遺跡のみとなり、中期も五遺跡と少ない。後期には増加するが、縄文時代に比べると少ない。地域的にみると分布の中心は潤井川流域で、縄文時代にあまり分布しなかった富士宮扇状地および周辺高地にも現れる。芝川流域・富士根地域でも確認されるが、潤井川流域と同様、縄文時代に比べ

ると少ない。

古墳時代は前期には弥生時代後期より増加するが、地域的な傾向は弥生時代後期と変わらない。中期には富士宮扇状地および周辺高地を残して途絶える。後期には若干回復するが、その内容には地域差があり、潤井川流域の高台や富士根地域では古墳が多くなる傾向がみられる。

次節以降は、時代別に特徴をみていく。説明にあたり遺物包含層については、図1-3の本書での区分名称による。また、日本全国および静岡県の遺跡数については文化庁の『平成二八年度埋蔵文化財関係統計資料』の平成二八年度周知の埋蔵文化財包蔵地数を参照し、本文中では「包蔵地数」とする。

地域	遺跡名	後期旧石器	縄文時代						弥生時代			古墳時代		
			草創期	早期	前期	中期	後期	晩期	前期	中期	後期	前期	中期	後期
扇状地	浅間大社			◎							△	◎	◎	◎
	城山										◎	○	○	○
	北神田										◎	○	△	△
	通雀町										△	△		
潤井川流域	羽衣町										◎			
	西町										◎			
	泉					△					◎	△		
	田中										◎			
	沢沢							△	△	◎				
	福伝										◎	△		
	大中里坂下		△	△	△	◎	◎	△			◎	△		
	大中里坂上					◎	◎	◎						
	滝戸		△	△	△	◎	◎	△				△	△	
	押出										◎			
	東田												△	
	坊地上			◎		◎							△	
	野中中村					◎							△	
	南部谷戸			△	△	△	△						△	
	月の輪平			△	△	△	△					△	△	
	野中向原					◎	◎					△		
	五反田						○							
	月の輪上			△								△	△	
	奥山地			◎										
	坊地下												○	
	坊地南												○	
	月の輪下												◎	
	黒田向林			◎										
	下高原	◎		◎		△	△							
別所										◎				
沼久保坂上	○		△											
谷外						◎	◎							
小松原A		△	◎		△									
東下組											◎	◎		
御園						◎								
北山辻											◎			
芝川流域	山際		△											
	小森		△											
	小塚A	◎	△	◎	◎									
	小塚B			◎	◎									
	小塚C	◎		△								○		
	南原					◎	◎							
	猫沢上谷戸			△		◎	◎				◎	◎		
	猫沢新田					△	△							
	抽野和平					○	○	◎			◎	◎		
	抽野辻					◎	◎	○		△	◎			◎
	大鹿窪		◎	◎	△									
	白糸の滝			◎				○						
	上谷戸					△	△				△			
	千居					◎								
長者ヶ原B										△	△			
精進川神田					△									
富士根地域	焼畑			◎		◎	◎							
	杉田中村					◎	◎							
	滝ノ上			◎		◎	◎							
	丸塚			◎										
	新梨			◎	◎	◎	◎							
	若宮		△	◎								△		
	代官屋敷			◎	△	◎								
	神祖			○		○					△	△		
	寺内				◎							△		
	大室					◎	◎							△
	三ツ室			△							△	◎		
	木ノ行寺					○	○					△		△
	権現					◎						◎		
	石敷			△							△	◎		
	箕輪A・B			△	△	◎	◎							
	出水			◎		◎						◎		
	峯石			◎	◎	◎							△	
	丸ヶ谷戸			△	△						△	△		△
	辰野							◎	◎		△	△		
	松葉					◎	◎							
東谷戸					◎						◎			
稲干場			◎		◎	◎								
上石敷		△	△		△						△			
村山浅間神社					△									
ワラビ平					◎	◎	△							

表1-2 富士宮市内の遺跡の一覧(主要遺跡を抜粋。ただし、古墳は表1-3に別掲。)

◎ 確実なもの    ○ ほぼ確実なもの    △ 時期が明らかになったもの





図1 - 5 富士宮市内の主な遺跡の位置



## 第二節 後期旧石器時代（四万年前～一万六〇〇〇年前）

富士宮市における人々の活動は、後期旧石器時代から始まる。日本における後期旧石器時代は、約四万年前から一万六〇〇〇年前で、始良Tn（丹沢）テフラ（火山灰）の降下を目安に前半期と後半期に区分される。「日本列島においては基本的には台形様石器群・ナイフ形石器群・尖頭器石器群・細石刃石器群の順で変遷がたどれる」（堤二〇一一）。『日本列島の旧石器時代遺跡―日本旧石器（先土器・岩宿）時代遺跡データベース―』によれば、全国では一万一五〇遺跡、静岡県は二六一遺跡が確認されている。また、包蔵地数は全国で七九二八遺跡、静岡県は四〇二遺跡である。

後期旧石器時代の富士宮市域の遺跡数はこれまで八遺跡とされていたが、このうち四遺跡はその後の検討で縄文時代草創期とされたため、確実なものは下高原遺跡・小塚A遺跡・小塚C遺跡・沼久保坂上遺跡の四遺跡である（図1-6）。

下高原遺跡は潤井川流域の星山丘陵で確認され、ナイフ形石器や尖頭器などの狩猟具が出土した（写真1-4）。遺物包含層（図1-3②）は愛鷹山麓の第I黒色帯から第Iスコリア層に対比される（中村 二〇一一）、三万～二万八〇〇〇年前と考えられる（三好二〇一〇）が、富士宮市域の他の遺跡の遺物包含層との対比は明らかではない。

小塚A遺跡・小塚C遺跡は芝川流域の羽耐丘陵南部で確認され、ナイフ形石器や尖頭器などの狩猟具や細石刃核・剥片（石器製作の素材や破片）などが出土した（小野ほか 一九七二、写真1-5）。遺物包含層は黄褐色火山灰土層および暗褐色砂質土層である（図1-3①②）。なお、小塚A遺跡では、黄褐色火山灰土層下部でATとされる火山ガラスが検出されATより下位にも遺物包含層がある可能



図1-6 後期旧石器時代の遺跡



性が指摘されている（芝川町教育委員会 一九九五a）。

これらの遺跡はいずれも河川を望む高台に位置し、ほとんどの遺跡は台地上の開けた場所に立地することと整合的である。また、いずれも田貫湖岩層<sup>がんせう</sup>なだれや他の土石流堆積物の影響を受けていない高台にある。富士宮市内の他の場所に旧石器時代の遺跡があったとしても、田貫湖岩層<sup>がんせう</sup>なだれや他の土石流堆積物に埋められたとみられるため、それらの検出は困難であろう。

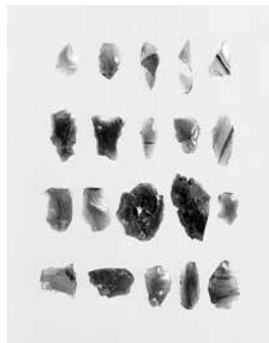


写真1-4 下高原遺跡の発掘現場と出土遺物



写真1-5 小塚A遺跡の発掘現場と出土遺物

### 第三節 縄文時代（一万五八〇〇年前～二四〇〇年前）

縄文時代の包蔵地数は、全国で九万四八四遺跡、静岡県内では二四一八遺跡である。最終氷期の最も寒冷な時期を過ぎた約一万六〇〇〇年前頃から植生が変化する。狩りの対象はシカやイノシシのほかにキツネやタヌキ、ウサギなど敏捷な動物に変わり、新しい狩りの道具として弓矢が発明された。粘土の加熱による化学変化を応用して土器が発明され、煮沸用具として使用され、可食範囲が飛躍的に拡大したため、ドングリ・トチ・クリ・クルミなどの堅果類が食料の主体であったと推定される。縄文時代は、温暖な気候下の自然環境に適応し、採集経済のもとで定住生活を送った時代といえる。

一般的には土器様式により草創期・早期・前期・中期・後期・晩期の六期に区分される。縄文時代は、食料資源に恵まれ人口が大きく増加したと推計されている。しかし、これを時期別・地域別にみると増減が著しい。東日本では中期に人口が大きく増加した後、晩期に向かつて大きく減少する。西日本では後期に向かつて次第に増え、弥生時代の発展につながる。この傾向は遺跡数でもみられる。

富士宮市域では一五八遺跡が確認され、湧水が多い潤井川流域の高台、星山丘陵、芝川流域の高台、富士根地域の開析谷（浸食によってできた谷）の高台に集中する（図1-7）。総体的には静岡県東部と同様の傾向がみられるが、地理的に関東地方・中部山地・東海地方の境界に位置することから、各地の変化を反映した動きもあると考えられる。そこで、富士宮市域での出来事の時期（層準）を特定することは、日本全国の変化を説明する手掛かりとなると考えられる。ここでは、出土層準による遺跡間の時期を比較するが、表面採集による場合や地層がかく乱されている場合など、出土遺物と出

土層準の関係が十分吟味できない場合もあるため、ここでは土器形式による編年も参考とした。なお、縄文時代の土器編年は、小林謙一（二〇一七）に準拠する。

#### 草創期（約一万五八〇〇年前～一万二五〇〇年前）

縄文時代草創期は後期旧石器時代からの移行期にあたる。氷期末期のいわゆる「寒のもどり」の再寒冷期で気候は不安定な時期と考えられる。人々の食生活では、アク抜き技術が定着し、ドングリ・トチ・クリ・クルミなどの利用が始まっていた。遺跡の立地は、定住化の始まりや、河川漁労など生業の多様化など旧石器時代とは異なる生活様相に適した場所に移り、段丘面から丘陵面や低地面への進出がみられる。

静岡県内の遺跡数は、『県内発見の時期別遺跡数・住居数』（静岡県 一九九四、以下「県内発見の時期別遺跡数」）によれば六遺跡である。

富士宮市域の遺跡は、芝川流域の小塚A遺跡と大鹿窪遺跡が知られているが、後期旧石器時代または縄文時代の時期不詳とされている遺跡のうち、潤井川流域の滝戸遺跡、芝川流域の山際遺跡、富士根地域の土敷敷遺跡・若宮遺跡など八遺跡は出土遺物から草創期の可能性が高い。

富士宮市域における遺物包含層の上限は漸移帯上面である（図1-3）。下限についてはオレンジスコリアより下位で草創期の遺物が出土していることから、黄褐色火山灰土層中と考えられるが、これまでのところ特定できていない。なお、黄褐色火山灰土層は、愛鷹山麓の休場層（約一万五〇〇〇～二万三〇〇〇年前）と対比して



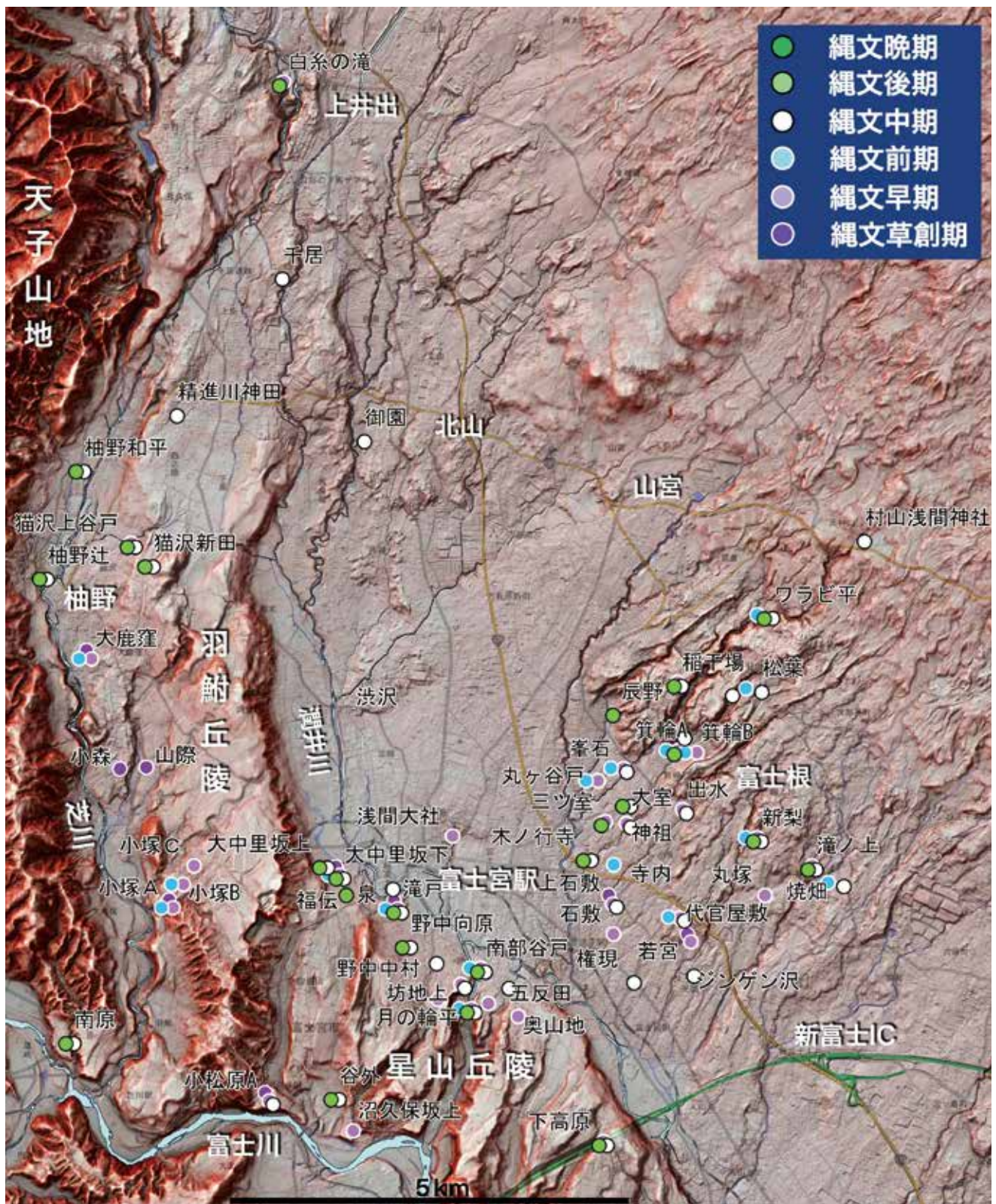


図1-7 縄文時代の主要な遺跡



いる遺跡もあるが、草創期の包含層として休場層より上位に位置づけられる可能性がある。

草創期の遺跡のうち大鹿窪遺跡では、竪穴住居址が一五基、竪穴状遺構が二基検出された。竪穴住居址のうち一〇基は馬蹄形ばていけいとなって広場を持ち、その中に土坑・集石・配石を築いている（写真1-6）。遺構・遺物はⅠ～Ⅲ期に分けられ（図1-3③）、Ⅰ期は遺物の形式などから一万六〇〇〇～一万五〇〇〇年前の年代が推定されている。また、放射性炭素同位体による年代測定から、Ⅱ期は一万三三〇〇～一万二九〇〇年前を含む年代、Ⅲ期は一万二九〇〇～一万二五〇〇年前を含む年代と推定されている（小林ほか二〇二二）。集落として同時期に存在した可能性がある住居の最大数は七基と推定されているが、長期間の定住というより季節的な移動の中で繰り返し住んだと考えられている。

その他の遺跡については、出土遺物から小塚A遺跡・滝戸遺跡は大鹿窪遺跡のⅡ期、小松原A遺跡こまつばら・若宮遺跡は大鹿窪遺跡のⅢ期より少し後の草創期終末に対比され、当該時期における富士宮市域の人々の流れについてより詳細に検討ができる可能性を秘めていると考えられる。今後、草創期の包含層下限の確定を含めた層準の検討が課題である。

### 縄文時代早期（約一万二五〇〇年前～七〇〇〇年前）

気候は温暖となり海水温が上昇し海進（海面が上昇し、海岸線が内陸に移動すること）が起き、植物質食料や水産資源の利用が進み、定住が進んだことから文化圏が成立する。早期後半になると生産・加工用の石器が充実し、釣り針の出現や貝塚の成立など生業体系に変化が起きた。

県内発見の時期別遺跡数は五二六遺跡である。早期前半に縄文文



竪穴住居跡



令和2年度調査区全景



写真1-6 大鹿窪遺跡の遺構と出土遺物



化が定着し、東部で集落が増えるが、中部・西部は少ない。『静岡県史』によれば早期前半ではおおむね東部が関東地方、中部以西は西日本の影響があるが、その後関東地方の影響が西部に広がっていったとされている。早期後半になると、愛鷹山麓・箱根を中心に東部で遺跡数が増加し、中部にも広がりを見せる。一方、西日本から中部山地に中心を移した文化の影響が静岡県西部から中部まで及ぶ。

富士宮市域の遺跡数は五三遺跡である。遺跡の立地は、小河川を望む高台が多い。遺物包含層は、暗褐色土層（富士黒）の下底から早期と前期の境界の目安とされるK1Ahまでである（図1-3④）が、K1Ahは富士宮市域では地層中に単層として堆積していることは少なく認識されないことが多い。

早期の初めは潤井川流域の安居山低地で小松原A遺跡が草創期から続き、星山丘陵では下高原遺跡が確認される。芝川流域では小塚A遺跡、富士根地域では若宮遺跡が草創期から続く。若宮遺跡は東海地方の縄文時代早期を代表する遺跡で、早期としては全国屈指の規模を持つとされる。竪穴住居二八棟、炉穴跡六〇基、集石土坑跡一三基などが検出され、多数の遺物も出土した（写真1-7）。そのほか、上石敷遺跡、箕輪遺跡・代官屋敷遺跡などが現れる。

早期の中頃になると、潤井川流域に滝戸遺跡・月の輪平遺跡などが現れる。富士根地域では、早期の初めに現れた遺跡が途絶え、代わって滝ノ上遺跡・出水遺跡などが短期間現れる。富士宮扇状地では、浅間大社遺跡の北側の高地で遺物が確認され、初めて進出したことが確認される。土器の系統から富士宮市域の遺跡における文化の変遷をみると、早期中頃に関東文化圏から東海・近畿の影響が強くなる時期があるが、この時期がどの層準にあたるのかは特定できていない。

早期末には鬼界カルデラが噴火し、九州南部の文化を壊滅させ、

噴出した火山灰（K1Ah）の影響は、前期末に起きた東海地方西部および関東地方から中部山地への人々の移動を引き起こしたとの指摘もあり（小松 二〇〇五）、富士宮市域における遺跡数激減との関係も検討する必要がある。



集石土坑



竪穴住居跡



写真1-7 若宮遺跡の発掘調査区と住居址

## 縄文時代前期(約七〇〇〇年前～五五〇〇年前)

後氷期の最温暖期にあたり、海進がピークに達する。文化の中心は鬼界カルデラの噴火で壊滅した南部九州から、東北地方や東日本に中心が移る。土器の器形・文様・組み合わせは年代差・地域差が著しくなる。土偶・石棒などの呪物や装身具が登場し、祭祀施設（まじり）と思われる巨大な施設も登場する。定住性はさらに高まり環状集落が構築され、遠浅の海岸には多くの貝塚も現れる。関東地方の内陸ではコナラ・クリなどの暖温帯落葉広葉樹林となるが、関東地方・中部地方の沿岸から西日本は照葉樹林となる。植物の採集・狩猟・漁労などの道具はほぼ出そろい、木製品が作られるようになり漆の技術も開発された。水産資源を食物資源に組み込み、関東東部では内湾性漁労が発達する。

県内発見の時期別遺跡数は三三五遺跡で、早期より減少する。遺跡数は東部に多く、中部・西部で少ない。前期後半になると活性化して東部を中心に増加し、中部・西部でも増える。

富士宮市域では二二遺跡に減少する。遺物包含層は、暗褐色土層(富士黒)のK-Ahより上位である(図1-3⑤)。前半は芝川流域で大鹿窪遺跡、潤井川流域の高台に滝戸遺跡、富士根地域で箕輪A・B遺跡(以下「箕輪遺跡」)・峯石遺跡・代官屋敷遺跡などが確認され、東海地方の遺物が出土する。このうち、箕輪遺跡は早期から後期まで続く大型遺跡で、早期前半の土器を伴う竪穴住居群が見つかっている(写真1-8)。滝戸遺跡・小塚A遺跡・箕輪遺跡などはその後も続き、さらに、前期中頃を境に星山丘陵に月の輪平遺跡などが確認される。富士根地域では代官屋敷遺跡が再出現するとともに、ワラビ平遺跡（たぐい）などが現れる。前期後半には出土する遺物の傾向が変わり、関東地方・中部山地の遺物が多くなる。遺物の傾向が変わる時期は、前期中頃と思われるが、今後出土した土器の層準を遺跡ごとに比較することが必要である。



写真1-8 箕輪遺跡の発掘調査区全景

## 縄文時代中期(約五五〇〇年前～四五〇〇年前)

中期前半までに日本列島に九つの地域圏が成立した。石器の種類は植物質食料の利用が進んだことを示し、関東地方・中部山地にはクリ林の文化が成立した。漁業技術は、関東以北から北海道では多様な漁法が存在するようになる。遺跡の立地は、小河川の流域や湧



水に近い場所になる。中期末になると、気候の寒冷化による環境変化により、関東地方で遺跡数の減少が始まる。また、最上川中・下流域（中村 二〇一三）、八戸市南部（菅原 二〇一七）などでも遺跡立地の変化が確認されている。

県内発見の時期別遺跡数は一〇七一遺跡である。伊豆半島では、西関東の関連が深く、愛鷹・箱根から掛川にかけては八ヶ岳山麓（中部山地）の中期文化とよく似た内容の文化が現れる。また、遠江西部の平野部には、近畿・瀬戸内系が現れ伊那谷（長野県）まで広がる（静岡県 一九九四）。

富士宮市域では、一・二遺跡が確認される。遺物の包含層は栗色土層で上限は千居スコリアと考えられる（図1-3⑥）。千居スコリアは千居遺跡で住居址を埋める降下物であるが、他の遺跡では成層としては確認されていない。ただし、同一層準と思われる栗色土層の最上部にスコリアが点在する例があることから富士宮市域における中期と後期の境界として扱う。

遺跡の分布は前期までと同様、潤井川流域・芝川流域・富士根地域に集中するが、さらに上流まで進出する。星山丘陵では、丘陵面が浸食された谷や安居山低地などにも進出する。

中期前葉の遺跡は、関東地方の遺物が出土することが多い。中期中葉になると、中部山地の影響を受けた遺跡が多くなる。特に、芝川流域ではほとんどの遺跡で中部山地の遺物が出土するようになる。また、富士根地域では関東地方と中部山地の遺物が混在して出土するようになり、星山丘陵では関東地方、中部山地に加え東海地方の影響を受けた遺跡が現れる。中期後葉にはそれまで分布がなかった高地や山間地への進出が確認される。芝川流域では、千居遺跡・上谷戸遺跡（猪之頭）など、潤井川流域でも不確実ながら北山で確認される。また、稲子川流域でも確認される。

千居遺跡や上谷戸遺跡は、富士川から芝川の沿岸に連なる遺跡の延長にある。富士川・芝川のような大・中河川は山梨県境や八ヶ岳山麓に至る手段として使われたことを示す可能性が考えられる。ただし、この時期に高地に進出した遺跡は、中期末までの短期間で断絶してしまう。千居遺跡はその典型である。

千居遺跡は、中部山地の土器が出土する大規模な集落で、一〇棟前後の竪穴住居跡が構成する「ムラ」が、千居スコリアに埋もれて存続できなくなり放棄された後、集落の上に全長四〇m以上の列石が二列作られた様子が確認されている（写真1-9）。広場を囲む住居群との境に境界として設けられた遺構と考えられているが、富士山の方向を向いていることから、火山活動を意識した可能性もある。住居址の上に配石を築いた例は、滝戸遺跡・峯石遺跡でも確認され、千居遺跡と同様の時期と考えられている。なお、この時期は、関東で確認されるのと同様に富士宮市域でも多くの遺跡が衰える。その理由として千居遺跡にみられるような火山活動の影響も考えられるが、遺跡・層準ごとの出土遺物の推移をとらえることで、静岡県内や全国のできごととの関係がより一層鮮明となることが期待される。



写真1-9 上空から見た千居遺跡（赤破線の部分が大規模な列石・北東方面が富士山）

### 縄文時代後期（約四五〇〇年前～三二〇〇年前）

気候の寒冷化は進み、中期に中部や関東に広がったクリ林の文化は衰退し、中部山地の遺跡数が中期に比べ激減する。遺跡の減少は全国でも確認され、北海道東部ではほとんど遺物が発見されなくなる。海岸線の後退は東北地方・関東地方・中国四国地方の遺跡立地に変化をもたらし、高台から低湿地遺跡や低地遺跡に変化する。中期後半から出現した配石遺構は東北地方を中心に大規模な環状列石などの巨石文化につながる。呪術的・祭祀的な遺物が東北地方を中心に増加する。後期後半には、文化圏が再編され新たな土器も現れる。県内発見の時期別遺跡数は三四九遺跡に減少する。中期末からの遺跡数の減少の影響は特に東部で著しく、中・西部の三分の一程度まで激減した。一方、中・西部を中心に長期間継続する拠点集落が営まれるようになり弥生時代につながる。

富士宮地域の遺跡数は減少し、六二遺跡となる。遺物の包含層は黒褐色土層（黒ボク、図1-3⑦）で、三一五〇年前に噴出したと考えられる大沢スコリア（本章第一節）が包含層かどうかは現時点では明確ではない。遺跡の分布は中期と同様であるが、関東地方の遺物が出土するようになる。約四〇〇〇年前を境に、滝戸遺跡（写真1-10）・大中里坂下遺跡<sup>おおなかざとさかした</sup>などで出土する遺物が減少し、それ以外の遺跡は途絶する。富士宮市域における遺跡の減少については、関東地方や中部山地で顕著に表れた気候変動の影響が考えられる。また、集落立地の変化による低地への進出も起きており、富士山南西麓では、浮島沼<sup>うきしまぬま</sup>方面への移動が考えられる。そのほか火山活動の影響の可能性もあるが、いまのところ明らかではない。



### 縄文時代晩期(約三三〇〇年前〜二四〇〇年前)

縄文時代晩期は、沿岸部などの一部を除くほとんどの地域で衰退がみられる。衰退の原因は寒冷化により食料として利用していた植物が減少したことがあげられる。特に中部山地では植物食に依存していたため影響を強く受けたと思われる。一方、関東地方南部では海岸地帯に遺跡が集中するようになることから、環境変化に応じ立地を変えることで生活手段の変更を試みたことが考えられている。県内発見の時期別遺跡数は一八四遺跡に激減する。静岡県域全体で減少する中でも特に東部において著しく減少する。

富士宮市域でも激減し、縄文時代晩期とされている遺跡数は八遺跡となる。包含層は調査の少なさも相まって明らかではないが、現状では大沢スコリアの前後ではないかと考えられる(図1-3⑧)。また、大沢スコリアより上位は、ほとんどの遺跡で耕作によるかく



遺物の出土状況



写真1-10 滝戸遺跡後期の出土遺物



写真1-11 辰野遺跡の発掘調査区と出土遺物

乱などを受けており情報が少ない。後期から維持された遺跡が継続するほか、晩期前半に若干回復するが、晩期中頃にはほとんど途絶する。潤井川流域では、潤井川の屈曲点の段丘上に大中里坂上遺跡・大中里坂下遺跡が確認されている。大中里坂下遺跡は、後期から継続する遺跡で、石剣などが出土している。芝川流域では、芝川中流域の段丘上に柚野<sup>ゆの</sup>和平<sup>わだつ</sup>遺跡が確認されているが、未調査のため詳しいことはわかっていない。また、富士根地域で確認された辰野<sup>たらの</sup>遺跡では、石器のほかアクセサリーも出土している(写真1-11)。

富士宮市域での晩期末の遺跡数の減少は、大沢スコリアが広い範囲に厚く堆積したことで環境の変化が大きかったことが影響した可能性が考えられるが、静岡県東部地域における遺跡数の減少との関係は明確ではない。

## 第四節 弥生時代（二四〇〇年前～一八〇〇年前）

弥生時代には本格的な水田稲作が開始され、金属の使用や機織りの開始など新たな文化要素が現れる。水田経営のため指導者のもとで集団としての結びつきが強くなりムラが形成され、ムラとムラは土地や水などの資源と鉄器などの道具をめぐる争い、やがて統一されて各地に小さなクニが生まれ、小さなクニはさらに集散を繰り返して古墳時代に続く。

弥生時代の時期区分は前期・中期・後期に分ける意見や前期以前の「早期」を加える意見がある。開始時期は、約二四〇〇年前とする意見のほか、九州で水田稲作が始まったころの土器に付着した炭化物の年代から約二九〇〇年前（藤尾ほか 二〇〇五）とする意見などいくつかの考え方がある。

富士宮市域における遺物包含層は大沢スコリアより上位であるが、耕作によるかく乱などによる影響を受けており明らかになっていない。包蔵地数は全国では三万八八九遺跡、静岡県は一四八九遺跡である。富士宮市域全体では五〇遺跡であるが、具体的な内容がよく分からない遺跡も多い（図1-8）。

### 弥生時代前期から中期

九州に伝わった稲作は次第に東に広がるが、初期は小規模で遺跡数も少ない。西日本では水田稲作に適した平野の中心部に立地する一方、尾張平野では土器形式による中心部と周辺部の住み分けがみられる。東日本でも縄文時代晩期後半から弥生時代中期初めまでの遺跡は少なく、確認される遺跡も小規模で短期間に廃絶する例がほとんどとされる。中期には西日本（北部九州・畿内・瀬戸内・山陰など）の平野部で遺跡が密集し、環濠集落や高地性集落も出現する。

中期後半には東日本でも遺跡が増加し特に平野部に密集する。一方、東北地方でも遺跡は増加するが増え方はゆるやかである。

稲作を受容した時期・段階は地域によって異なる。静岡県域では前期から影響を受け、紀元前一世紀頃に定着したとみられ、中期から丘陵や台地の裾野の扇状地や小河川に沿った高台に水田稲作中心の農耕集落とみられる遺跡が現れる。弥生時代を通じて遠江西部（天竜川以西）、遠江中・東部（太田川・菊川流域）、駿河西部（大井川から清水）、駿河東部および伊豆（富士川以東）の四つの地域圏に分かれ、開析谷の扇状地から河川が流域に形成した自然堤防上など生産の場である水田の適地に広がっていった（静岡県 一九九四）。

富士宮市域での弥生時代の始まりは前述のとおり大沢スコリアの影響でよくわかっていない。前期の遺跡は現在までのところ確認されていない。ただし、渋沢遺跡は前期から始まる可能性がある。

弥生時代中期の遺跡立地は縄文時代とは異なり段丘上でもより低い場所となる。富士宮市域の遺跡数は五遺跡で、潤井川流域の渋沢遺跡・別所遺跡、潤井川支流の風祭川上流の押出遺跡など五遺跡が確認されるが、中期前半には途絶えてしまう。

渋沢遺跡は富士宮市域の弥生遺跡のうちで最も早く現れた遺跡で、潤井川流域の潤井川低地上流の段丘上に立地する（写真1-12）。丘陵や台地の開析谷の扇状地や小河川に沿った平野部を望む位置にあり、水田に近く自然の災害を避けやすいという静岡県域における弥生時代前半の立地の特徴を示す例の一つとされる（静岡県 一九九四）。また、稲穂を摘むための石包丁などの農具と石鏃・石斧などの狩猟具が同時に出土していることから、ごく初期の農耕生産力では生活を維持できず狩猟・採集に依存せざるを得なかったこ



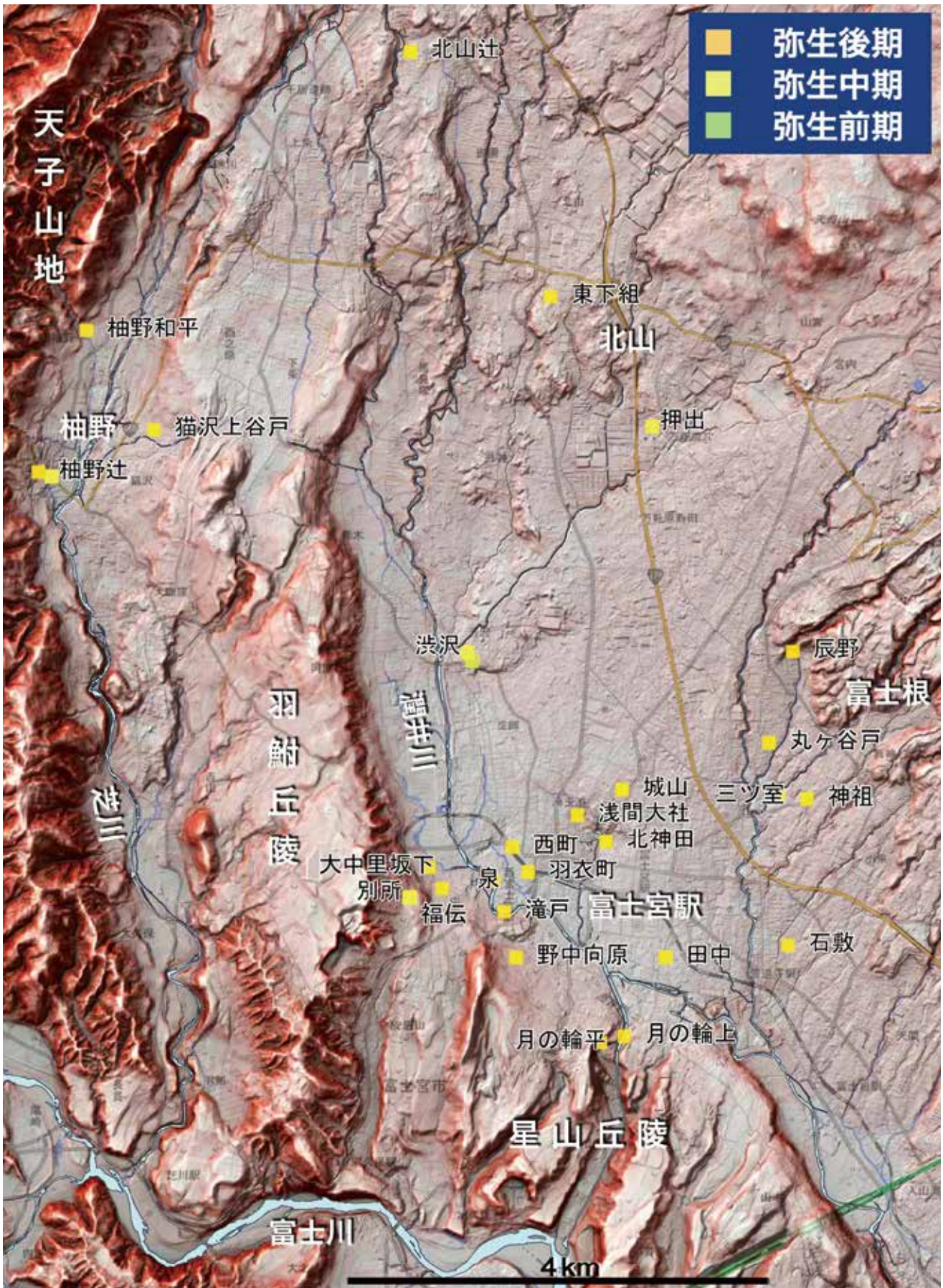


図1-8 弥生時代の主要な遺跡



とが推測される。

富士宮市域では弥生時代中期後半から遺跡が途切れる。この要因について、同時期に静岡県東部では低地への進出がみられ、富士市域でも浮島沼周辺の遺跡が低地に進出する（藤村 二〇一七、松原一九九二）ことから、「この地域で最初の水田耕作を行った渋沢の人々は、耕作技術の向上に伴って面積が広く生産性も高い吉原方面の低湿地に進出していった」（植松 一九七二）とする意見がある。

### 弥生時代後期

弥生時代後期になると関東以西で遺跡が増加する。特に畿内の弥生時代後期集落の約七割はこの時期から始まる。中期までとは異なり、水田耕作には不向きな台地地帯にも畑作を基盤とする遺跡群が形成された。

静岡県域では丘陵上の集落に代わり、低地に規模が大きく拠点となるようなムラが営まれる。二世紀後半から三世紀にかけて弥生時代の遺跡数は増加し、紀元前一世紀からの拠点集落以外にも有力なムラが現れる。東部でも、愛鷹山東南麓などで低地の遺跡と同様な遺跡の進出がみられる（静岡県 一九九四）。

富士宮市域では四七遺跡が確認されている。遺跡分布の中心は潤井川流域で、潤井川低地では泉遺跡（写真1-13）が確認される。後半には、潤井川低地内の微高地で羽衣町遺跡・西町遺跡などが確認される。また、星山丘陵や潤井川を望む高台でも滝戸遺跡・月の輪上遺跡・月の輪平遺跡・野中向原遺跡などが確認される。一方、芝川流域でも中流域に柚野辻遺跡・猫沢上谷戸遺跡など、富士根地域では石敷遺跡・丸ヶ谷戸遺跡・神祖遺跡などが確認される。

潤井川低地で確認された遺跡が短期間で途絶えるのに対し、月の輪平遺跡など高台の遺跡は古墳時代まで続く。同時期に静岡県域で



写真1-12 渋沢遺跡の発掘現場と出土遺物



は高台への進出がみられることから、自然災害からの逃避のために水田の適地と考えられる低地から高台に移動した可能性が考えられる。一方これらの遺跡は、環濠や掘立柱建物（高床倉庫など）、方形周溝墓などが確認されること、同時期の東九州大野川流域、南九州シラス台地、南信濃伊那谷などに畑作を基盤とする遺跡群が形成されたことから畑作を基盤とする遺跡群の可能性もある。



写真1-13 泉遺跡の発掘の様子と出土遺物

泉遺跡では再々の洪水に見舞われた中で、集落が再構築されたことが分かっている。

第五節 古墳時代（一八〇〇年前～一三〇〇年前）

古墳時代は首長などの墓である墳墓の築造が特色で、水田稲作を基礎に手工業生産や流通が発達し、より大きな権力を持った豪族が各地に出現した。本稿では前・中・後の三期に区分する。

包蔵地数は全国では二〇万七八二三遺跡、静岡県では二〇二九遺跡である。富士宮市域の遺跡数は一一九遺跡とされているが、三遺跡は誤認、五遺跡は古墳時代ではない可能性がある（図1-9）。また、そのうち二〇遺跡は古墳または古墳群である（表1-3）。遺跡の包含層は、大沢スコリアより上位であるが弥生時代同様にかく乱などを受けているため、時期別の包含層は特定できない。

地域	名称	前期	中期	後期
潤井川流域	中里古墳			△
	南原古墳			△
	滝戸遺跡			○
	塚本古墳	△		
	月の輪法印塚古墳	△		
	南部谷戸古墳群		△	
	滝戸一号墳			○
	別所1号墳			△
	別所稲荷塚古墳			△
	藪塚古墳			△
	別所蛇塚古墳			△
富士根地域	大室古墳			○
	神祖山ノ神古墳			○
	神祖2号墳			○
	神祖3号墳			○
	寺内山ノ神古墳			○
	虚空蔵社古墳			○
	元村山古墳	△		
	若宮古墳群			△
朝霧高原	姥穴古墳	△		

表1-3 主な古墳と時期 ○確実 △可能性あり

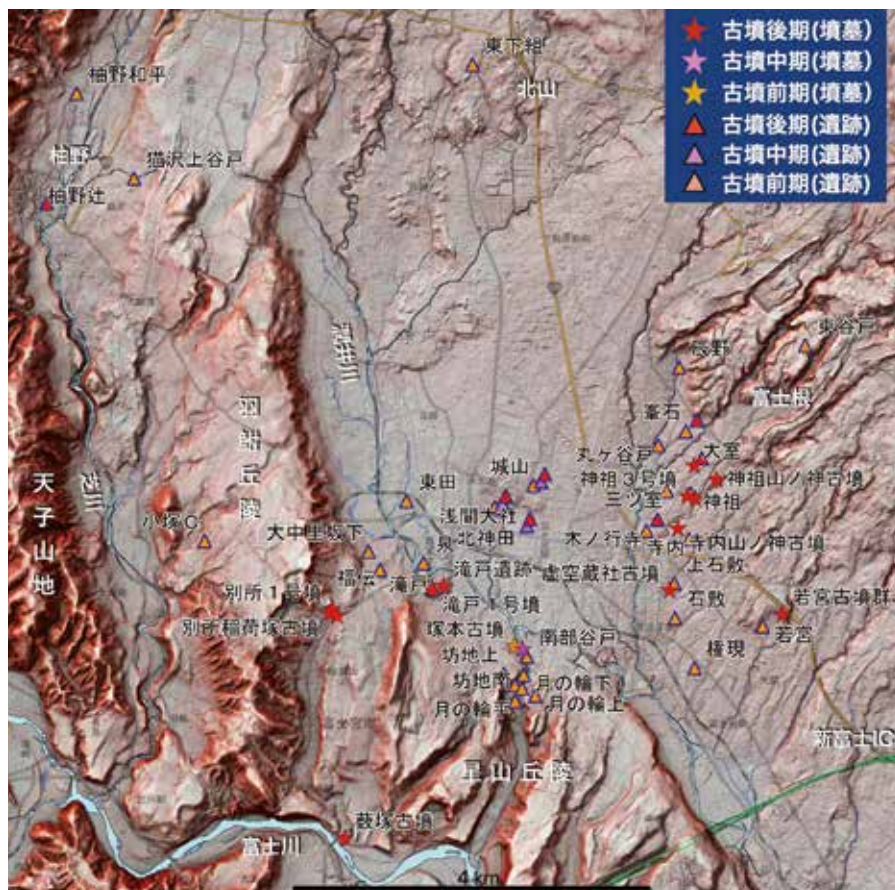


図1-9 古墳時代の主要な遺跡



## 前期（三〜四世紀）

三世紀後半頃に前方後円墳が成立し大型古墳の造営が始まる。静岡県で最古の古墳は、三世紀半ばごろに出現し、四世紀にかけて磐田原台地（前方後方墳から前方後円墳に移行）・静岡（前方後円墳）・清水（前方後方墳から前方後円墳に移行）・愛鷹山麓（前方後方墳）で大型古墳が作られる。これらの地域では首長層の成長の基盤となる経済的に安定した農耕社会があったことがわかる（静岡県一九九四）。

富士宮市域の遺跡数は古墳を含めて、六八遺跡で弥生時代後期より増加する。富士宮扇状地では、中期以降も続く浅間大社遺跡を中心に連雀町遺跡や城山遺跡が確認され、この時期から平地に進出を始めたことがわかる。一方、潤井川流域では、高台に滝戸遺跡や月の輪平遺跡群、低地に泉遺跡などが現れ、中流の自然堤防上や北山にも進出する。芝川流域では、羽鮒丘陵西斜面や中流域の柚野地区で遺跡が確認されるようになり、上流の田貫湖畔でも長者ヶ原B遺跡が確認される。長者ヶ原B遺跡は、狩猟に関する拠点と考えられるが、甲府盆地を結ぶルート開発の可能性も指摘されている。富士根地域では丸ヶ谷戸遺跡・石敷遺跡などが続くとともに、寺内遺跡・木ノ行寺遺跡など新たな遺跡も現れる。

このうち、丸ヶ谷戸遺跡では、高床式倉庫や竪穴住居跡とともに古墳時代初頭に造営された前方後方形周溝墓が確認された（写真1-14）。前方後方形周溝墓は古墳とは異なり弥生文化の伝統を引き継ぐ埋葬施設で、主に濃尾平野で造営されたものであることから東海地方の影響が強くなったことがわかる。また、長軸方向が富士山頂を指すことから、富士山との関りも考えられる。

富士宮市域では、低地に進出した遺跡は短期間で途絶える。このことは、後述の古墳造営が少ないこととも関連する可能性がある。



写真1-14 丸ヶ谷戸遺跡の前方後方周溝墓

一方で、水田稲作に不向きな高台では遺跡が継続する。その理由としては、畑作の技術向上による耕作可能域の拡大、狩猟・採集生活への回帰、商品作物の導入などが考えられる。

前期に造営された可能性がある古墳は四基あるが、確実なものはない。近接する平野部（静岡・清水・愛鷹山麓）では大型古墳を造営する勢力が成長したのに対し、富士宮市域では低地に進出した遺跡が短期間で途絶えるように勢力成長の背景となる水田稲作が可能ない土地が少なかったことを示唆する。

### 古墳時代中期（五世紀）

中期になると、墳丘規格の共有が政治的結びつきの印として用いられ、墳丘も巨大化する。静岡県内では、畿内系きないけいの大型前方後円墳や大型円墳が造られ、首長層の階層差も現れる（静岡県 一九九四）。富士宮市域の遺跡数は四遺跡で、遺跡数は前期に比べて一〇分の一下に減少する。

この時期には、潤井川流域・芝川流域・富士根地域では集落など（古墳以外）の遺跡は確認されていない。一方、富士宮扇状地には、浅間大社遺跡と北神田遺跡きたかんだが本格的に進出する。特に北神田遺跡は、中世以降の建設による破壊を受け、残存部分も多くが未確認であるが、古墳時代中期の大集落であった可能性がある（写真1-15）。この周辺は、現在地に富士山本宮浅間大社が造営される以前からの居住地であったと考えられる。一方、中期に造営された古墳は、南部谷戸古墳群なんぶがやとに可能性があるとされているほかは明確ではない。



写真1-15 北神田遺跡発掘現場と出土遺物



## 古墳時代後期（六～七世紀）

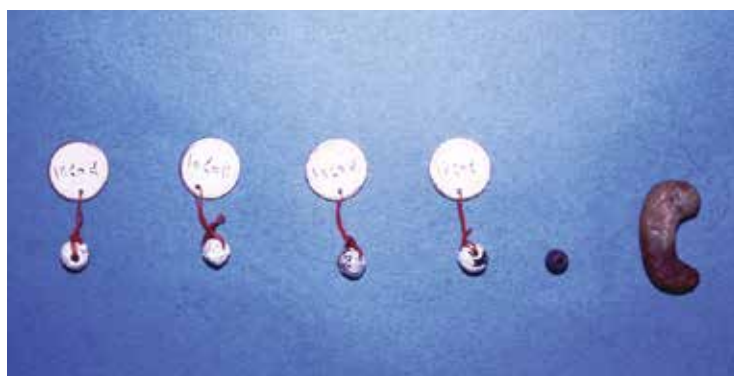
全国では古墳時代後期に入ると前方後円墳は一斉に姿を消し、古墳が規模縮小され構造も大きく変わる。山間部や離島にまで小規模な古墳が築かれ群集墳も造られた。その後、七世紀前半には群集墳も衰退する。静岡県内でも古墳から群集墳に移行したのち、七世紀中頃には遠江で群集墳の築造が一斉に中止され、例外的にわずかに築造する段階に入り、八世紀には県下全域で消滅する（静岡県 一九九四）。富士山は時折スコリアや溶岩を噴出し、大淵スコリアが雌鹿塚遺跡に影響を与えたことが示唆されている（松原一九九二）が、富士宮市域への影響を示す資料は見つかっていない。富士宮市域の遺跡数は古墳を含め二〇遺跡である。富士根地域や安居山低地などに古墳が分布し、住居址は富士宮扇状地や富士根地域に散在する。

富士宮市域の後期とみられる古墳は一五基あるが、破壊などで内容がわからないものが多い。このうち別所一号墳は昭和五九年（一九八四）・六二年（一九八七）に副葬品調査が行われ、その内容から被葬者はムラの長クラスの一族であり、金銅製の馬具で飾られた飾馬や金銅製の飾太刀を盛装に用い、多くの玉類や耳管で身を飾り多量の武具を持ってムラ人を支配する武人としている（植松一九九三、写真1-16）。

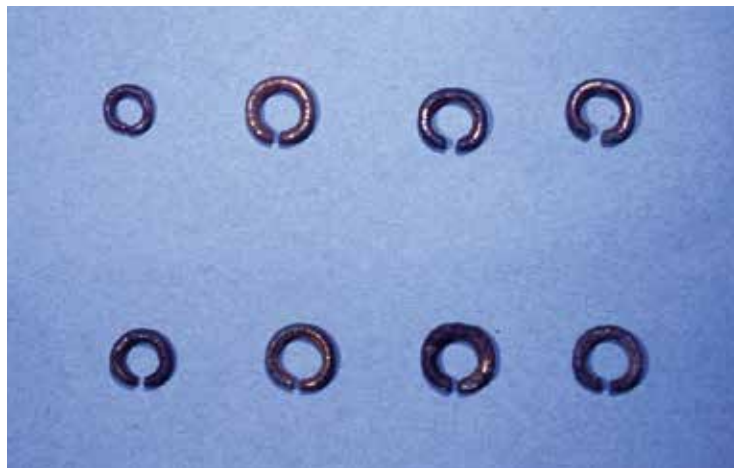
富士宮市域における後期古墳は、中里古墳のように所在が分からない古墳や消滅している古墳があり、これら以外にも記録されないまま消滅した古墳の情報もあると考えられる。また、古墳に対し住居址が少ない傾向もあり、北神田遺跡のように扇状地の下に埋もれ発見されていない遺跡の存在も考えられる。



銀象嵌の鐙



玉類



耳管

写真1-16 別所1号墳から出土した遺物

## 第六節 古代・中世における自然と人の関わり

文字による記録が見られるようになる古代・中世においても、自然と人はさまざまな関係を結んできた。史料は限られるが、その中から、自然と人の関わりが見えるものをいくつか取り上げ、紹介する。

### 古代の富士山噴火と浅間神社

古代以降における富士山噴火は、天応元年（七八一）の噴火をはじめとして、複数回記録されている（第一編第一章第四節）。中でも貞観六〜八年（八六四〜八六六）に発生した貞観の噴火は大規模な噴火として知られている。その様子は『日本三代実録』などの史料に見ることができる。

それによると、富士山噴火の報告は、貞観六年五月二五日（八六四年七月二日）に駿河国から届けられた。その勢いは甚だしく、地震も伴い、一〇日余り経っても静まらなかったという。また、本栖湖には溶岩が流れ込んだとしている。同年七月（八月）には甲斐国からも噴火について報告されている。そこでは、剝の海に溶岩が流れ込んだことが記されている。貞観七年（八六五）には、甲斐国八代郡に浅間明神祠を立てるといふ記事がある。浅間神社は富士山の噴火を鎮めるために祀られたと考えられている。

浅間神社の一つに山宮浅間神社がある。この神社は富士山頂から流れ出た青沢溶岩流の末端に位置する（第一編第一章第四節）。現在、神社の本殿にあたる場所に建物はなく、溶岩礫を積み上げた石塁によって区画された空間がある（写真1-17）。これは、富士山を直接拝むための遙拝所とも言われている。ここには石列が残されており、祭祀における神官らの座席を示すものとされている。



写真1-17 山宮浅間神社の石塁と富士山

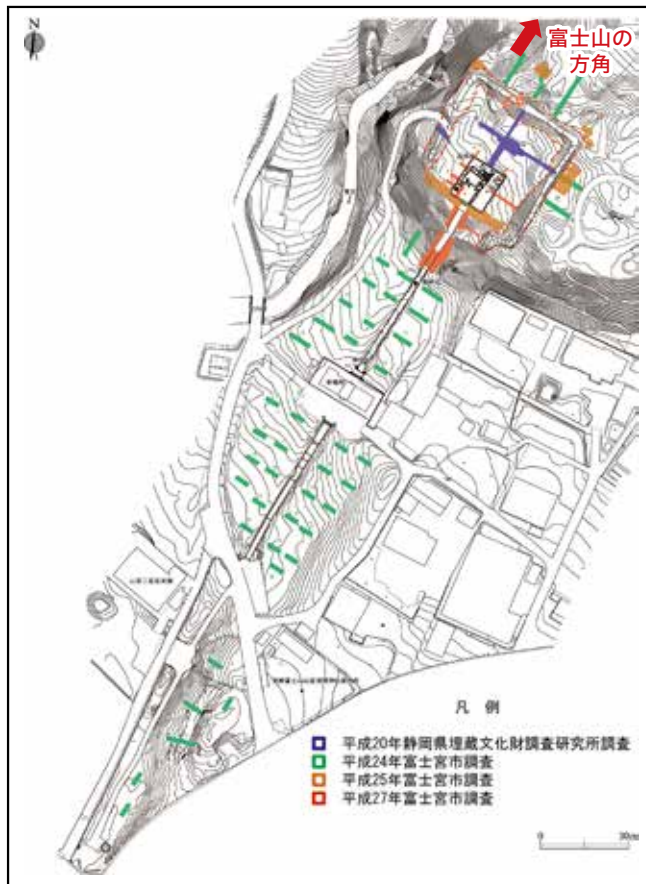


図1-10 山宮浅間神社発掘調査図面

赤破線の箇所が石塁。



写真1-18 山宮浅間神社発掘調査の出土遺物



る（宮地・廣野 一九二九）。

山宮浅間神社では、史跡整備に伴い複数回の発掘調査が行われている（図1-10）。調査では、一二〜一五世紀の土師器（素焼きの土器）の破片が多数出土しており、これらは祭礼の際に使用され、その場に廃棄されたものと考えられている。その他、中国産の陶磁器や国産陶器の破片も出土している（写真1-18）。石罫は出土遺物から、一二世紀ころに構築されたものと考えられている。また、階段状遺構も確認されている。

### 『吾妻鏡』に見る自然と人の関係

鎌倉幕府初代將軍の源頼朝は、建久四年五月（一一九三年六月）より富士山の麓で巻狩を催した。巻狩の最中、頼朝の嫡男・頼家が初めて鹿を射止めた。その後、この日の狩は中止し、晩になり、その場所で山神・矢口などを祀った。矢口とは、武家の男児が初めて獲物を射た際の儀式である。鎌倉時代の歴史書『吾妻鏡』には、その儀式の様子が詳しく記されている。

建仁三年六月（一一〇三年七月）、二代目將軍となっていた頼家もまた、父・頼朝にならい、富士山の麓で巻狩を催した。その際、頼家は仁田忠常に命じて人穴を探検させた。人穴は富士山の犬涼み山溶岩流の中に形成された溶岩トンネルである（第一編第一章第四節、写真1-19）。

『吾妻鏡』によると、忠常は重宝の御剣を賜り、主従六人で穴に入った。しかし、日が暮れても戻らず、翌日に帰ってきた。忠常の報告によると、主従は狭い穴の中で引き返すことができず、奥へ進むと、大きな河に行き着いた。そこで火の光に当たり、河の向こうに奇特が見えると、郎従四人がたちまち死亡したという。忠常は霊の教えに従い、御剣を河に投げ入れ、生きて帰ってきたという。



写真1-19 人穴入口

その後、古老に聞いたところ、人穴は浅間大菩薩の御在所で、今回のことは恐るべきことだと語ったという。富士山の神仏（浅間大菩薩）と人穴を結びつける信仰が当時から存在していたことが分かる。

### 富士海苔

中世以降、駿河国からの献上品や贈答品として、富士海苔が史料に出てくる。これは芝川の溪流に繁茂する淡水産緑藻の一種で、清涼な流水でないと繁茂しない。芝川海苔とも呼ばれる（写真1-20）。古くは鎌倉時代、上野の南条時光が身延（現山梨県）の日蓮に「かわのり」を贈った事が知られている。

室町時代の永享二年（一四三〇）、時の室町幕府將軍・足利義教は駿河国守護・今川範政に対して、富士海苔を贈られたことへの礼を述べている。また、富士山本宮浅間大社（浅間大社）の大宮司である富士氏もこの富士海苔を贈答品として活用していた。永享六年（一四三四）と推定されている管領細川持之書状写から、富士海苔や伊豆海苔のお礼として、太刀一腰が富士大宮司へ贈られたことが分かる。

戦国時代の公家・三条西実隆の歌集『再昌草』には、中御門宣胤から富士海苔を贈られた時のものとして、宣胤の和歌と実隆の返歌が収録されている。実隆の返歌は、「音にきく 富士のしは川 しはしはも けにうへもなき 法のあちはひ」とあり、富士海苔とその産地である芝川が京都でも知られていたことが分かる。後の天文四年（一五三五）、実隆は後奈良天皇に富士海苔を献上している。

その他、戦国時代の記録では、弘治二〜三年（一五五六〜一五五七）に駿河国に下向した山科言継は、寿桂尼（今川氏親の妻）や御黒木（言継の養母で寿桂尼の姉妹）から富士海苔を贈られている。京都から下ってきた公家への土産としても活用されたと考えられる。



写真1-20 現在の富士海苔（芝川海苔）



## 戦国時代の風祭神事

浅間大社では、風祭と呼ばれる神事が行われていた。風祭とは、農耕儀礼の一種で、風を収めて五穀豊穣を祈る神事である。現在、風祭川の潤井川との合流地点付近（富丘小学校の北側）には、女石・男石などと名前の付いた石があり、祭壇の位置を示すとも言われている（『富丘村誌』、写真1-21）。

古文書では戦国時代から記述を確認でき、天文二二年（一五五二）、今川義元が春長に対して四和尚と風祭を安堵し、怠りなく務めるよう指示している。弘治三年（一五五七）の今川義元朱印状では、風祭の費用である風祭神事米について定められている。それによると、西は潤井川、東は伊豆国との境までの範囲で、寺社や不入の印判を持つ者であっても関係なく集めるようにと指示している。

天文・弘治年間、今川氏が相模国の北条氏との争い（河東一乱）を経て、富士川以東の河東地域の支配を安定化させていく時期とされている。こうした背景をふまえ、風祭神事米が広範な地域から徴収されていたことは、浅間大社の神事である風祭が、今川氏領国全体に関わる神事になったためであると言われている（大久保一九八六）。



写真1-21 風祭川